

ISBN 978-4-903875-23-1

Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series 20

ユーラシア諸言語の多様性と動態－20号記念号－

ユーラシア言語研究コンソーシアム 2018年3月発行

Diversity and Dynamics of Eurasian Languages: The 20th Commemorative Volume

The Consortium for the Studies of Eurasian Languages

日本語の意志動詞・無意志動詞とその構文的な性質

(研究ノート)

Volitional and Non-volitional Verbs in Japanese
and their Structural Characteristics (research note)

早津恵美子

HAYATSU, Emiko

日本語の意志動詞・無意志動詞とその構文的な性質（研究ノート）

早津恵美子

動詞、意志/無意志性、構文的な性質、結合価、意味と文法

1. はじめに¹

ある動詞が意志動作を表すか無意志動作を表すかという性質（意志/無意志性）とその動詞の構文的な性質（ここでは特に、その動詞が組み合わせる名詞の語彙的な意味とその名詞のとり格形式という結合価的な性質）との関係についてはこれまであまり論じられることがなかった²。しかし、人の動きを表す動詞には意志動詞も無意志動詞もあり、構文面ではヲ格名詞と組み合わせるものもそうでないものも多いのに対して、事物の動き（変化も含む）を表す動詞には無意志動詞しかなく、構文的にほとんどの動詞がヲ格名詞と組み合わせられないという特徴がある。また意志動詞にも無意志動詞にも、ヲ格名詞とは組み合わせられないもののニ格やカラ格やト格の名詞と組み合わせるものがあり、それがどのような語彙的意味（とくにカテゴリカルな意味³）の名詞であるかは、同

※ 「庄垣内先生にご相談したらどんなご助言をいただけるだろう」というのが、それがかなわなくなってからも、なにか拙論をまとめる途中やできあがってから、しばしば心に浮かぶ気持ちです。私は庄垣内先生のお授業を受ける機会はありませんでしたが、博士論文をまとめる過程などで、藤代節さんと一緒に勉強会をしてくださったり、お酒の席に誘ってくださったたり、その中でほんとうにたくさんのことを教わりました。（いたずらもいろいろされましたが……） 厳しくて優しく、そしてときにお茶目な先生が大好きでした。

¹ 本稿は、2017年3月30日に京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター（羽田記念館）で行われた2016年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会において研究発表をした際の原稿をもとにしている。発表の場や終了後にご意見をくださった方々に御礼申しあげる。また、本稿について匿名の査読者から貴重なご指摘をいただき、修正や加筆をすることができた。それについても感謝申しあげる。

² 角田（1991[2009:85-90]）では他動性と「volitionality（意志性・意図性）」の関係が考察され、「(自身の) 調べた範囲では、意志性は他動詞文と自動詞文の区別とは無関係である」と述べられている。他動詞か自動詞かというのは動詞の構文的な性質のひとつだが、この角田（同）では、動詞そのもののvolitionalityではなく、動詞を述語とするある具体的な文が意図的な動作を表すかどうかの問題にされている。また対格（ヲ格）以外の名詞との組み合わせについては問題にされていない。

³ 単語の語彙的な意味のうち、その単語の文法的（構文的・形態的）な性質にかかわる側面を「カテゴリカルな意味」ということがある。カテゴリカルな意味については早津（2009、

じ格の名詞であっても組み合わせる動詞の意志/無意志性によって違いがある。

本稿は、動詞の意志/無意志性と構文的な性質との関係について今後本格的に論じるための足がかりとして、まず日本語の動詞のうち人の意志動作を表す動詞について、その構文的な性質（主としてどのような名詞項と組み合わせるか）を確認しておこうとする研究ノートである。ただし、意志動詞の構文的な性質が無意志動詞（人の無意志動作や事物の動きを表す動詞）のそれとは異なりそうだとすることをみておくために、無意志動詞の構文的な性質についても簡単に述べることにする。

2. 意志動詞・無意志動詞についての論考

日本語の意志動詞・無意志動詞、あるいは動詞の意志性⁴について述べられている論考は少なくない（宮島 1972、大鹿 1987、仁田 1988、仁田 1991a、仁田 1991b、角田 1991[2009]、柳田 1994、杉本 1995、杉本 1997、パルデシ 2007、高 2012、等）。ここでは、宮島（1972）—動詞の意志性を「主として動詞のムードの形のありなしを基準にして検討」したうえで無意志動作の種々のタイプを指摘し、それぞれを表す動詞例が多くあげられているもの—と、杉本（1995、1997）—いくつかの「客観テスト」（後述）を用いた詳細な検討によって意志動詞と無意志動詞の分類を行っているもの—とを、それぞれ 2.1 節、2.2 節で簡単に紹介する。そして 2.3 節で、意志動詞を述語とする文が必ずしも意志動作を表すわけではないこと、意志動詞か無意志動詞かの峻別がそもそも難しいものであることを確認する。

2.1 宮島（1972）

宮島（1972）は「現代語の動詞の意味・用法を、言語作品のなかで実際に使われた用例によって分析・記述する」（p.1）ことを目的とする研究である⁵。方法として「1 対の単語⁶の意味を区別する特徴」を「意味特徴」とよぶとして（p.14）、8 つの意味特徴、すなわち「1.主体」「2.対象」「3.動作・作用の属性」「4.環境」「5.結果」「6.意図」「7.原因」「8.評価」がとりだされ、それぞれの観点から動詞

2015、2016）で様々な具体例をあげて説明している。

⁴ 意志性・無意志性の概念と近いものとして、「自己制御性 self-controllability」（仁田 1991a、仁田 1991b 他）、「随意性・不随意性」（峰岸 2007）が提案されているが、本稿では、広く知られ大方の了解の得られている意志性・無意志性を用いることにする。

⁵ この書の「はじめに」の「1.目的と方法」（pp.1-9）および、「第 1 部 意味特徴の記述」の「0.前置き」（pp.14-21）には、単語の意味の記述はどうあるべきかについて、簡単にではあるが種々の立場を紹介しつつ、この書の立場（宮島氏の立場）が述べられていて、重要な指摘が多い。

⁶ ここで「1 対の単語」とされているのは、「両方または一方が 1 語のこともあり、何語かになることもある」というものであり（「みる：みかける」「つる/募集する：あつめる」等）、「1 対の単語群」ともされる。

の意味が分析・記述されている。そして、これらの意味特徴のうち「6.意図」の観点から分析・記述する(pp.422-429)にあたって、「まず動詞を意志的な動作をあらわすかどうかという点で分類しなければならない」として、「主として動詞のムードの形のありなしを基準にして検討」され⁷、次の3つに大別して動詞があげられる。举例としては、「(A)有情物の意志的動作」を表す動詞は多数あるとしてあまり例示されず、(B)と(C)の例が多くあげられている。(B)と(C)については、下位の類に分けて各類の意味的な特徴と多くの動詞例が示されている。本稿では下位類を単に「//」で区別して語例をあげる。

(A) 有情物の意志的動作： よむ、はしる、わらう

(B) 有情物の無意志動作： あおざめる、うまれる、疲れる // 痛む、しびれる、ただれる // うき足だつ、泣きくずれる、涙ぐむ、(顔を)赤らめる // 照れる、しょげる、(仕事に)飽きる、(物音に)驚く // おちぶれる、つまづく、(お詫びを)いいそびれる、(財産を)うしなう、(宛名を)書きそんじる、(名前を)聞きわすれる // 居合わせる、となりあう、(人と)であう、(級友と)めぐりあう、(噂を)つたえきく // (用事を)いいつかる、(影響を)こうむる、(伝言を)ことづかる、(子供を)さずかる // いがみあう、いちゃつく、でしゃばる、いなおる // たすかる、つとまる、(試験に)うかる // (仕事に)ありつく、(目的を)とげる、(責任を)まぬがれる // かわりはてる、たちつくす、出はらう // 黙する、まみえる、つどう

(C) 非情物の動き： いなく、はばたく、(卵を)うみつける // しなびる、生ずる、なえる // おいしげる、咲く、つぼむ // さびれる、はやる // 輝く、けむる、こおる // あてはまる、うわまわる、とだえる、ぶりかえす // くずれる、こわれる、さめる、縮む、ふえる // (統一を)保つ、(数千を)算する、(時間を)くう // (活況を)呈する、(物議を)かもす

このように3類に分けて動詞例があげられているが、「(A)(B)(C)の分類で、1つの動詞がつねに1つのワクにはいるというわけではない」(p.423)ことにももちろん触れられている。また、心理現象や心理的な生理現象を表す動詞には命令形や意志形は使われないが禁止形は使われる(「?驚け、?驚こう」vs.「驚くな」、「?あわてろ、?あわてよう」vs.「あわてるな」)ものがあること⁸、そして、

⁷ いわゆる命令形や希望形等の語形や、「～ベキダ」「～ツモリダ」「～テミル/テオク/テアル」等の合成的な語形(「走る」についていえば、「走れ(命令)、走るな(禁止)、走ろう(意向、勧誘)、走りたい(希望)」や「走るべきだ、走るつもりだ、走ってみる、走っておく、走ってある」等)が使われるかどうかという性質が検討される。

⁸ 仁田(1988)は、命令と禁止を、「(動作の)達成の命令・達成の禁止」と「(ある状態になるような)過程の命令・過程の禁止」とに分けて意志/無意志性との関係をみいだしている。すなわち、意志動詞の命令形は動作が達成することを命令/禁止することができる(「あっちへ行け」「二度と来るな」)のに対して無意志動詞は達成の命令/禁止は表せない。ただし、無意志動詞のうちには、過程の命令が成り立ち過程の禁止は成り立たないもの

「喜べ」「苦しめ」という命令形がなりたつとしても、これは「すわれ」「食べる」等の命令形とちがって「主体の意志的な選択によって可能な現象であるかどうかは、うたがわしい」ことも注意されている (pp.425-426)。動詞の「ムードの語形」の有無は、たしかに意志/無意志性を判断する目安にはなるが、これによって意志動詞か無意志動詞かを峻別することは容易ではない⁹。

2.2 杉本 (1995、1997)

杉本 (1995、1997) は、宮島 (1972)、久野 (1973)、仁田 (1988、1991a、1991b) 等を検討したうえで、意志動詞と無意志動詞の定義として、「主体の意志が、動詞が示す動作・作用・状態の成立・実現の決定要因となっている動詞を意志動詞とよび、それ以外の動詞を無意志動詞とよぶ」(杉本 1997:36) とする。そして意志動詞か無意志動詞かを判断する検証形式として「私は(が) [特定の時点・期間] ～します」という時間的限定のある意思表示文(次の例1)の成否を第一の基準にし、さらに他の「客観テスト」として、動詞の「～う/よう」、「～まい」、命令形、「～う/ようと思う」、「～(する)つもりだ」、「～てみる」等といったいくつかの「表現形式」、および一定の副詞(「やむをえず、おそろおそろ、強引に」等)との共起関係を調べることで意志動詞か無意志動詞かを判断している。次の(2)～(5)で、aは意志動詞、bは無意志動詞の例である。

(1)分かりました。それじゃ私は6時に出かけます。(杉本 1997 の例 8)

(2)-a 僕はそろそろタバコをやめようと思う。(杉本 1995 の例 19)

-b *二三日中に風邪をひこうと思います。(例 23)

(3)-a 君はもうあの店に行ってみた? (例 52)

-b *去年別れた女房のことを忘れてみる。(例 54)

(4)-a やむをえず手を上げた。(例 122)

-b *やむをえず心配した。(例 126)

(5)-a 恐る恐る振り向いた。(例 124)

-b *恐る恐る間違えた。(例 128)

このような共起関係の確認は、他の論考でもしばしばなされることだが、杉本 (1995、1997) で興味深いのは、「心的作用を表わす動詞」(「考える、覚える、疑う、諦める、信じる、決める、予想する」等)を意志動詞か無意志動詞かの判定の難しいものとして積極的にとりあげ、それについて「作用の停止」の検

(「落ちつけ」「落ちつくな」-これは少ない)、過程の命令は成り立たず過程の禁止はなりたつもの(「?心配しろ、?あわてろ」「心配するな、あわてるな」)、いずれも成り立たないもの(「?乾け」「?乾くな」-無意志動詞一般)があるとする。

⁹ 語形と文法的な意味にずれがあることもしばしば指摘されることである。「(雨が)降る」は、「♪雨、雨、降れ、降れ、母さんが……」(「あめふり」という歌詞の中で命令形が使われているが、これらは命令形本来の意味での使用ではなく、話し手の願望を表している。「形」として命令形が用いられるとしても、「降る」はやはり無意志動詞である。

討、すなわち「その作用を一定期間（例えば1日間）停止できるかどうかという検討」を行うことによって、心的作用を表す動詞についても意志動詞か無意志動詞かを分類していることである。表現形式としては「～（する）のをやめる」「～しないことにする」「～しないでおく」等を使った文の「文法的、語用論的成立の如何」（杉本 1997:38）によってなされている。それによって、たとえば、「思う」は無意志動詞、「考える」は「意志動詞・無意志動詞両方の用法をもつが、基本的には意志動詞」、「覚える、予想する」は「純然たる意志動詞」、「疑う」は「基本的には意志動詞で、部分的に無意志動詞の用法をもつ」のように判断される。これらの動詞の意志性の判断は、それでもやはりなかなか難しいように思われるが、動詞の意志性を考えるにあたって貴重な示唆である。

2.3 意志動詞を述語とする文の表す事態

意志動詞がつねに意志的な動作を表すわけではないことは上にもあるようによく知られていることだが、ここでもあらためて確認しておく。

まず、動詞の多義性にかかわるものとして次のような例があり、それぞれ a の文は人の意志動作を、b の文は事物の動きを表している。

(6) a 子供が笛を吹く。 b 風が吹く。

(7) a 学生が校庭で走っている。 b 村の中を高速道路が走っている。

(8) a みんなが自分の意見をはっきりいう。 b 風で戸がガタガタいう。

(9) a 選手たちは整列してゆっくり前に進んだ。 b 工事が順調に進んだ。

また、多義というほどではなくても、意志動詞を述語とする文が、意志的に行われる動作だけでなく、無意志的になされた動作を表すことがある。

(10) 運んでいた花瓶を {a わざと : b うっかり} 落とした。

(11) a 食事のあとに水を飲んだ。 b 溺れて水を飲んだ。

(12) a 枝を手で半分に折った。 b 転んで足を折った。

(13) a 魚を網でこんがり焼いた。 b 空襲で貴重な書物を焼いた。

次の文も、意志動作を表せる動詞が人の意志的でない動きを表している。

(14) 先発投手がきょうも相手チームに先取点を許した¹⁰。

(15) 僕がミスをしたせいで、敵に反撃のチャンスを与えることになった。

このように、ある動詞が意志動詞か無意志動詞かを、動詞そのものの種類として截然と区別することはむずかしい。宮島（1972:424）のいうように「意志動詞というのは、主として意志的動作にもちいられる動詞」とし、それ以外を「無意志動詞」とみなすのが大方の合意であり、本稿でもそれがよいと考える。

¹⁰ 長谷川（1969:79-86）はこの種の表現と軍記物にみられるいわゆる「武者詞」の表現（「親は子を討たせ兄は弟を失ひ」）との類似性を指摘し、「随順」用法すなわち、自らの外なるなんらかの力の存在、その関与によって、その状態にナル、その状態のママニナル、といった「自然発動的な言い方」としている。

さて、意志動詞と無意志動詞については、語彙的な意味（カテゴリーカルな意味―注 3 参照）に支えられた形態論的な形の成否¹¹、およびその形の表す文法的な意味についての考察が、先の杉本（1995、1997）をはじめ、豊かになされてきた。それに対して、冒頭にも述べたように、動詞の意志/無意志性とその動詞の構文的な性質との関係を全体として考察した論考はなさそうである。ただ、宮島（1972）では、先の 3 つの類のうち(C) 類すなわち非情物の動きを表す動詞について、「大部分が自動詞である点が注目される」（p.428）という点は述べられている。宮島（同）で自動詞というのは働きかけの対象を表すヲ格名詞と組み合わせられない動詞ということであり、(C) 類のうちヲ格名詞と組み合わせるのは、先の挙例のうち最後の 2 つの類、すなわち「(統一を) 保つ」等の「関係を表す動詞」類と、「(活況を) 呈する」等の「ある状態をひきおこすことを表す動詞」類であり、それ以外はヲ格名詞を必須項としてとらずその点で(C) 類の動詞の大部分が自動詞である。なお、(A) 類、(B) 類の動詞群の構文的な性質について宮島（同）ではとくに述べられていない。

以下では、先行の諸研究に学びつつ、日本語の動詞について、意志/無意志性と構文的な性質との関係を具体的に考えていく。

まず第 3 章では、人（有情物）の意志動作を表す動詞の構文的な性質を詳しくみていく。3 つの節すなわち、3.1「ヲ格の名詞と組み合わせる動詞」、3.2「ヲ格の名詞とは組み合わせられないが、ニ格・カラ格・ト格の名詞と組み合わせる動詞」、3.3「主体を表すガ格名詞のみを必須項とする動詞」に分け、それぞれの中で、組み合わせる名詞項の格や名詞のカテゴリーカルな意味によって下位分類をする。そして各類の動詞例を列挙するとともに、それぞれの類についてい

¹¹ ここで、「語彙的な意味（カテゴリーカルな意味）に支えられた形態論的な形の成否」というのは、単語の広い意味での語形（本稿の問題としては、意志形や命令形等の単純語形および「～ベキダ」「～ツモリダ」「～テミル」のような合成的な語形）の成否を判断する際に、その単語の語彙的な意味も考慮し、その語形が文中で使うことのできる形かどうかを判断するということである。動詞「ある」「はれる」は「アレ」「ハレロ」という命令形になるが、その形で“命令”の意味を表すものとして使うことはできない。それはこの動詞の語彙的な意味から判断できることである。本稿では「形態論」という術語を広くとりすぎているといえるかもしれないが、単語の他の単語との文中での関係を問題にする「構文論」に対するものとして、単語が文中で用いられる際の形の変化/不変化を問題にするものとして「形態論」を考えている。

なお、そもそも、ある動詞のたとえば“命令形を作る”ときにもその単語の意味がわからないと作れない。「きる」の命令形は、「着る」の意味ならば「キロ（着口）」、「切る」の意味ならば「キレ（切レ）」であり、「いる」は「居る・射る」の意味ならば「イロ」、「煎る、要る」ならば「イレ」である。そして後者の「煎レ」「要レ」が文中で使える形か否かはやはり意味が支えとなる。「あやまる（謝る・誤る）」「むす（野菜を蒸す、きょうはひどくむす）」の命令形は形としてはそれぞれいづれの意味でも「アヤマレ」「ムセ」だが、文中で使える形か否かを判断する際には語彙的な意味を考えることが必要になる。「おす（押ス・雄）」「ます（増ス・枘）」等が動詞活用をするかどうかはまず意味を考えることになる。単語の意味と切り離してその単語の形態論的な性質を考えることは難しい。

いわゆる格枠 (case frame) および名詞項の意味役割も示す。それらをもとに 3.4 「この章のまとめ」で人の意志動作を表す動詞の構文的な性質をまとめる。次に第 4 章では、無意志動詞すなわち人の無意志動作を表す動詞と事物の動きを表す動詞について考える。第 3 章と同じく 3 つの節に分けてみていくが、各節における下位分類や動詞の類型化は必ずしも十分ではない。それについては今後の課題とし、本稿では、意志動詞の構文的な性質が無意志動詞のそれと異なっていることを大まかに示せればと思う。

なお、動詞例を列挙する際、必須度の高い名詞項とともに示すが、主体を表すガ格の名詞は省略することが多い。

3. 人の意志動作を表す動詞

人の意志動作を表す動詞のうちには、動作主体を表すガ格名詞のほかに必須の項としてヲ格名詞と組み合わせる動詞が少なくない。いわゆる「他動詞」である。ただし、「自動詞」とされるものの中にも、「廊下を走る」「教室を出る」のようにヲ格の空間名詞等と組み合わせる動詞があることもよく知られている。まず、ヲ格の名詞と組み合わせる動詞の種類をみておく。

3.1 ヲ格の名詞と組み合わせる動詞

人の意志動作を表す動詞のうちヲ格名詞と組み合わせるものは、大きくふたつのタイプに分けられる。物や人や事への物理的・心理的な働きかけや関わりを表すいわゆる「他動詞」と、移動を表すいわゆる「自動詞」である。

3.1.1 物や人や事への物理的・心理的な働きかけや関わり

「他動詞」の表す動作は概ね、物や人や事への物理的・心理的な働きかけや関わりを表すとまとめることができ、構文的には働きかけや関わりの対象を表すヲ格名詞を必須項とする。そしてそれらの中には、ヲ格名詞のほかにニ格やカラ格の名詞をも必須項とする動詞があり、その多様なタイプについては、言語学研究会編 (1983) の諸論文、成田 (1983)、仁田 (1986)、森山 (1988) 等の研究や、辞典の形をとる小泉保他 (編) (1989) 等の成果がある。ここでは細分することはせず、ヲ格名詞のみを必須項とするものと、ヲ格以外にニ格・カラ格・ト格の名詞をも必須項にするものとに大別して、簡単に動詞例をあげる。

《人ガ N[物/人/事]ヲ (N[物/人/事]ニ/カラ/ト) V[働きかけ/関わり]》

(「N-ヲ」: 働きかけの対象、関わりの対象)

(「N-ニ」: 物の付着先、物の移動先、動作の目的、物の出現場所、授与の受け手、情報の受け手、物の与え手、情報の与え手、動作要求の相手)

(「N-カラ」: 取り外し先、物の移動元、授受の与え手、情報の与え手)

(「N-ト」: 相互動作の相手、判断内容)

- ・(枝を)切る、(スイカを)冷やす、(セーターを)編む、(黒板を)たたく、(バットを)にぎる、(子供を)はげます、(法律を)あらためる、(制度を)整える、(本を)読む、(進路を)考える、(子供/作文-を)ほめる、(人/国/花/平和-を)愛する、(本/職/やりがい-を)探す
- ・(切手を封筒に)はる、(本をカバンに)いれる、(ラケットを友人に)ゆずる、(客におもちゃを)売る、(友達に意見を)いう、(後輩に感想を)たずねる // (ゴミ箱をホームから)撤去する、(新聞から記事を)きりぬく、(親から小遣いを)もらう、(子供から話を)きく // (野菜を千葉から東京に)運ぶ、(担当を人事課から会計課に)移す // (軽井沢に別荘を)建てる、(報告書に間違いを)見つける // (友達をパーティーに)誘う、(若手を主役に)抜擢する // (客を店員と)まちがえる、(AをBに)たとえる // (会社に賃上げを)要求する、(子供に留学を)すすめる // (友人と意見を)かわす、(会社と契約を)結ぶ

この類の動詞いわゆる他動詞は非常に多く、上にあげたものはそのごく一部であるが、動詞の構文的な性質の多様性をさぐるという本稿の目的に鑑み、ここでは挙例をこれにとどめ、他の類の観察に移る。

3.1.2 空間的な移動 (1)

人が空間的に移動することを表す動詞(以下、「移動動詞」)には、「行く、来る」のように移動(空間的な位置変化)そのものを表す動詞や、「歩く、走る」のように移動の様態を表す動詞がある。また、宮島(1972:202-211)では、移動動詞について「動作のどの段階に重点をおいて表現しているか」が調べられ、次の4類に分けられている。

- | | |
|-----------------|----------------|
| ①出発の段階に重点があるもの。 | 「でかける」「出発する」の類 |
| ②経過の | 「むかう」「とおる」の類 |
| ③到着の | 「つく」「とどく」の類 |
| ④全部の段階をふくむもの。 | 「いく」「はいる」の類 |

これらさまざまな移動動詞は、移動の出発場所、通過場所、経由場所、到着場所、存在場所等を表すカラ格・ヲ格・ニ格の空間名詞をかなり重要な項としてとる。もちろん、移動動詞すべてがこれらのすべての格の名詞と組み合わせるというのではないが、ひとつの動詞が2種以上の格の名詞項と組み合わせることもある。この3.1.2節では、移動動詞のうちヲ格名詞と組み合わせるものを「空間的な移動(1)」としてとりあげ、ヲ格名詞とは組み合わせらないものを「空間的な移動(2)」として3.2.1節でとりあげる。

移動の際に經由する場所や通過する場所を表すヲ格の空間名詞をとる動詞として次のようなものがある。移動の様態を表す動詞や、「全部の段階をふくむ」動詞、「経過の段階に重点がある」動詞である。

《人ガ N[空間]ヲ V[移動]》 (「N-ヲ」: 経由場所/通過場所)

- ・(夜道を) 歩く、(第一コースを) 泳ぐ、(空を) とぶ、(廊下を) 走る、(校庭を) 走りまわる、(床を) 這う、(公園を) 散歩する、(名所を) 歩きまわる、(絶壁を) よじのぼる
- ・(山道を) 行く[#]、(暗い道を) 来る[#]、(夜道を) 帰る[#]、(来た道を) 引き返す[#]、(同じ道を) 戻る[#]、(坂を) のぼる[#]、(急斜面を) くだる[#]、(階段を) おりる[#]、(寒さの中を家に) 向かう[#] (動詞の右上の「#」については後述)
- ・(トンネルを) ぬける、(橋を) わたる、(公園を) 通る、(待合室を) 通りぬける、(駅を) 通過する、(門を) くぐる、(峠/線-を) こえる、(バス停を) 通りこす、(水たまりを) とびこえる、(角を) まがる

移動動詞と組み合わさるヲ格の空間名詞が出発場所を表すことがある(主として「出発の段階に重点がある」動詞)。ただし、出発場所がカラ格の空間名詞によっても表される動詞が多い。

《人ガ N[空間]ヲ/カラ V[移動]》 (「N-ヲ/カラ」: 出発場所)

- ・(教室-を/から) 出る、(岸-を/から) 離れる、(成田-を/から) 飛び立つ、(東京駅-を/から) 出発する、(会社-を/から) 去る、(駅前-を/から) 立ちのく、(そこ-を/から) どく、(席を) たつ、(役所を) 退出する

さらに、上にみてきた移動動詞の中にも、到着場所を表すニ格名詞、あるいは出発場所を表すカラ格名詞と組み合わさるものも少なくない(先に「#」を付した動詞)。

- ・(東京-に/へ) 行く[#]、(地下-に/へ) おりる[#]、(中国から日本に) 来る[#]、(会社から家に) 帰る[#]、(食堂から部屋に) 戻る[#]、(頂上に) のぼる[#]、(地下に) くだる[#]、(大阪から北海道に) 向かう[#]、(部屋から外に) 出る[#]

3.1.3 社会的な移動

《人ガ N[組織/事]-ヲ/カラ V[離脱]》 (「N-ヲ/カラ」: 元の所属先)

人がそれまで属していた組織や関わりをもっていた事柄から離れることを表す動詞は、元の所属先や関係していた事柄などを表すヲ格やカラ格の名詞と組み合わさる。

- ・(サークル-を/から) ぬける、(国連-を/から) 脱退する、(職場/仕事-を/から) はなれる

3.1.4 身体の向きの変化

身体の向きを変えることを表す動詞は、身体(あるいは身体の一部)の向く方向を表すヲ格の方向名詞と組み合わさる。

《人ガ N[方向]ヲ V[向きの変化]》 (「N-ヲ」: 身体の向く方向)

- ・(右を) 向く、(うしろを) ふりむく、(来た道を) ふりかえる

3.2 ヲ格の名詞とは組み合わせられないが、ニ格・カラ格・ト格の名詞と組み合わせる動詞

3.2.1 空間的な移動 (2)

移動を表す動詞の中には、ヲ格名詞とは組み合わせられないが、到着場所を表すニ格の空間名詞や出発場所を表すカラ格の空間名詞をとる動詞がある。「到着の段階に重点がある」動詞、「全部の段階をふくむ」動詞のなかにみられる。

《人ガ N[空間]ニ V[移動]》 (「N-ニ」: 到着場所)

- ・(会場に) 着く、(教室に) はいる、(ホテルから会場に) 出かける、(都会から田舎に) 疎開する
- ・(学校/ジム/病院-に) 通う、(進学校に) 通学する、(幼稚園に) 通園する¹²

《人ガ N[空間]カラ V[移動]》 (「N-カラ」: 出発場所)

- ・(穴から) 這い出る、(防空壕から) 走り出る¹³

なお、漢語サ変動詞のうち、移動を意味する漢字と場所を意味する漢字からなる二字漢語によるものは、到着場所を表すニ格や出発場所を表すカラ格/ヲ格の空間名詞をとりうるが、到着場所や出発場所がその漢語の意味にいわば内包されていることから、それらを表す名詞と単純に組み合わせるのはむしろめずらしい(「?家に帰宅する」vs.「家族の待つ新居に帰宅する」)。

- ・帰宅する、帰郷する、帰京する、上京する、入場する、入室する、入寮する、入居する、外出する、遠出する
- ・退場する、出港する、離陸する

3.2.2 物や人への物理的接触

人が物や人に対して物理的に接触することを表す動詞は、その接触の対象を表すニ格・ト格の物名詞や人名詞と組み合わせる。

《人ガ N[人/物]ニ/ト V[接触]》 (「N-ニ」: 接触の対象)

- ・(子供が親に) だきつく、(壁に) もたれかかる、(敵に) おそいかかる、(友達に) とびかかる
- ・(選手が相手-に/と) ぶつかる、衝突する

3.2.3 立ち居・姿勢の変化

¹² 「通う、通学する、通園する」のように反復的・習慣的な移動を表す動詞が組織を表すニ格名詞と組み合わせると、単にその組織のある場所へ移動するというのではなく、その組織への所属を表すようになることもある。

¹³ 3.1.2 節であげた「出る、離れる」等もこの「這い出る、走り出る」と同じく出発点を表すカラ格名詞と組み合わせる。しかしそれらが出発点を表すヲ格名詞とも組み合わせるのに対して、この「這い出る、走り出る」はヲ格名詞とは組み合わせられない。

人の立ち居ふるまいや姿勢の変化を表す動詞は、身体の付着先を表す二格の物名詞(や空間名詞)、そこから離れる所を表すカラ格の物名詞と組み合わせる。ただし、「あおむく、うつむく、うつぶせる」のように、どの方向に向くかを含みこんだ動詞は、主体を表すガ格名詞以外とは組み合わせりにくい(「?上にあおむく」)。

《人ガ N[物(/空間)]ニ V[立ち居・姿勢]》 (「N-ニ」: 身体の付着先)

- ・(いす/地面-に) すわる、(ソファーに) 腰かける、(最前列に) 立つ、(ベッドに) 横たわる、(畳に) 寝ころぶ、(芝生に) 寝ころがる、(ござに) 寝そべる、(床に) しゃがむ、(地べたに) すわりこむ、(席に) つく

《人ガ N[物]カラ V[立ち居・姿勢]》 (「N-カラ」: 身体の離れる所)

- ・(いすから) 立ちあがる、(ベッドから) 起きあがる、(ベンチから) とびのく

3.2.4 存在や滞在

人がどこかに存在したり滞在したりすることを表す動詞は、存在場所や滞在場所を表す二格の空間名詞と組み合わせる。

《人ガ N[空間]ニ V[存在/滞在]》 (「N-ニ」: 存在場所・滞在場所)

- ・(家に) いる、(東京に) 住む、(被災地に) とどまる、(田舎に) 定住する、(ホテルに) 滞在する、(親戚宅に) 寄寓する

3.2.5 社会との関係の変化や維持

人が組織や他者と一時的あるいは継続的に社会的な関わりをもつようになったり、関わりをなくしたりすることを表す動詞がある。これらの動詞は、関わり先を表す二格・ト格、あるいはカラ格・ヲ格の組織名詞・人名詞・事物名詞や、関わる社会的作業などを表す二格の事柄名詞と組み合わせる。

ただし、社会との関係の変化は他者との関わりの中でその達成や成就や回避などが決まるのであり、行おうとする人の意志だけではなしえない事態である。「実現への意志」をもつことはできるが、その成立まで責任をもつことができない動作だといえる(仁田 1991a)。社会との関係を変化させることを表す動詞は、そういった点で意志動詞か無意志動詞かの判断のむずかしい動詞群といえる。

まず二格名詞と組み合わせる動詞例をあげる。

《人ガ N[組織]-ニ V[所属]》 (「N-ニ」: 所属先)

人が組織に所属することを表す動詞は二格の組織名詞と組み合わせり、二格名詞が所属先を表す。

- ・(会社に) つとめる、(役所に) 就職する、(旧家に) とつぐ、(高校に) 入学する、(大学に) 進学する、(予備校に) 通う、(受験校に) 転学する、(委員会に) 所属する、(親会社に) とどまる

二字漢語サ変動詞のうち、前要素が「入」で後要素が組織を暗示する漢字からなるものには人が組織に所属することを表すものがあり、これらも所属先を表す二格名詞と組み合わせたり得る。ただ、その二字漢語の意味に所属先が内包されていることからそれが明示されないこともある。

- ・(大学に) 入学する、(サッカー部に) 入部する、(新内閣に) 入閣する、(病院に) 入院する、(サークルに) 入会する、(保険会社に) 入社する

《人ガ N[人/組織/事]-ニ V[態度]》 (「N-ニ」: 態度の向けられる先)

- ・(親/会社-に) 頼る、(師匠/規則-に) 従う、(法案/提案-に) 賛成する、(親/期待-に) そむく、(教師に) 反抗する、(親/制度-に) 反発する、(法律/改革-に) 反対する、(圧政に) 屈する

《人ガ N[事]-ニ V[従事(継続的/一時的)]》 (「N-ニ」: 従事する事柄)

・(仕事/課題-に) とりくむ、(教育に) たずさわる、(作業に) 従事する、(難しい仕事に) 挑戦する、(会議/授業-に) 出席する、(試合に) 出場する
二格の名詞と組み合わせる次のような動詞も、人の社会との関わりやその変化を表すものである。

- ・(仕事/会社-に) 慣れる // (商売に) 成功する、(交渉に) 失敗する // (花子/試合-に) 勝つ、(弟/賭け-に) 負ける // 大学/試験-に) 合格する

《人ガ N[職位・立場]-ニ V[就任]》 (「N-ニ」: 変化後の職位や立場)

人が社会の中である職位や立場につくことを表す動詞は二格の職位名詞や立場名詞と組み合わせる。

- ・(首相に) 就任する、(課長に) 昇任する、(名誉職に) つく、(係長に) 降格する

次に、カラ格名詞、ト格名詞などと組み合わせる動詞類をあげる。

《人ガ N[人/組織]-カラ V[独立]》 (「N-カラ」: 元の依存相手)

それまで依存していた人や組織から独立することを表す動詞は、元の依存相手を表すカラ格名詞と組み合わせる。

- ・(親/会社-から) 独立する、(師匠/本店-から) ひとりだちする

《人ガ N[人]-ト V[相互]》 (「N-ト」: 相互動作の相手)

2人(あるいはそれ以上の人)が相互に関わりあうことを表す動詞は、その相手を表すト格の人名詞と組み合わせる。

- ・(幼馴染と) 結婚する、(長年連れ添った妻と) 離婚する、(相手と) 交渉する、(先輩/強豪チーム-と) 戦う、(人と) 争う、(友達と) 喧嘩する

《人ガ N[人]-ト/ニ V[半相互]》 (「N-ト/ニ」: 半相互動作の相手)

2人(あるいはそれ以上の人)の間の、相互に同じように関わる動作や一方がより積極的に他方に関わっていく動作があり、これを表す動詞は相手を表すト格または二格の人名詞と組み合わせる。

- ・(先輩-と/に) 会う、(旧友-と/に) 再会する、(親-と/に) 相談する、(友達-と/に) しゃべる

3.3 主体を表すガ格名詞のみを必須項とする動詞

人の意志動作を表す動詞のうち、動作主体を表すガ格（主格）名詞のほかには必須の名詞項をとらないという動詞は多くない。次のような動詞がその類と考えられるが、これらのうちには多義的な動詞もあり、「悪事をはたらく」「授業を休む（“欠席する”の意）」「原発反対を叫ぶ」「人の失敗を笑う」といった用法ではヲ格名詞と組み合わせる。なお、これらのうちとくに生理運動のほうは意志動作といえるかどうかははっきりしない。

3.3.1 活動

《人ガ V[活動/休止]》

- ・遊ぶ、働く、騒ぐ、あばれる
- ・休憩する、休む（「ドライブでは2時間に20分ずつ休む」）

3.3.2 生理運動

《人ガ V[生理運動]》

- ・泣く、わめく、笑う、ほほえむ、叫ぶ、うなづく

3.4 この章のまとめ

以上この第3章では、意志動詞（人の意志動作を表す動詞）の構文的な性質を具体的にみてきた。大雑把な観察ではあるが、次のことが明らかになった。

- (1) 意志動詞は、いわゆる他動詞がヲ格名詞を必須¹⁴とするのはもちろんだが、いわゆる自動詞であっても、ヲ格・ニ格・カラ格・ト格の名詞をかなり必須の項としてとるものが多く、必須項がガ格名詞のみという動詞はごく少ない。
- (2) 意志動詞と組み合わせる名詞項の文法的な意味は、名詞および組み合わせる動詞のカテゴリカルな意味によって多様である。

「N-ヲ」：動作の対象、関わりの対象、生産物、経由場所/通過場所、出発場所、元の所属先、身体の向かう先、……

¹⁴ ある名詞項が文における必須補語であるか否かを判断するのは容易ではない。寺村（1982）は「必須補語」「準必須補語」「任意補語」の3つに分けているが、やはり判断はむずかしい。

- 「N-ニ」：到着場所、物の付着先、接触の対象、付着先、物の移動先、存在場所、滞在場所、所属先、半相互動作の相手、態度の向けられる先、従事する事柄、変化後の職位や立場、動作の目的、物の出現場所、授与の受け手、情報の受け手、動作要求の相手、……
- 「N-カラ」：出発場所、物の取り外し先、物の移動元、離れる所、元の所属先、元の依存相手、物の与え手、情報の与え手、……
- 「N-ト」：相互動作の相手、半相互動作の相手、接触の対象、判断内容、……

このように、意志動詞には主体を表す名詞項とのみ組み合わせる動詞はきわめて少なく、さまざまな文法的な意味を表す名詞項と組み合わせるという性質がある。このことは、人が意志的に行う動作というのは、人が外界（すなわち、物や他者や社会や空間や事柄）に対して積極的に働きかけたり、外界との関わりを持つようしたり関わりから離れようしたりする動きを表すものがほとんどであり、外界との様々な関係のありようが種々の名詞項で表現されるということなのだと思う。

4. 人の無意志動作や事物の動きを表す動詞

前章でみたように、人の意志動作を表す動詞は、構文的性質としてヲ格名詞のほか、ニ格・カラ格・ト格などの名詞を必須度の高い項としてとるものが少なくなく、それらの名詞の項としての文法的な意味も多様である。それでは、無意志動詞すなわち、人の無意志動作を表す動詞や事物の動きを表す動詞の構文的な性質はどうだろう。詳しい考察は今後の課題とし、ここでは試みに動詞類をたて、簡単にその性質をみってみる。

4.1 ヲ格の名詞と組み合わせる動詞

人の無意志動作や事物の動きを表す動詞には、ヲ格名詞を必須とする動詞が類として多くない。2.1 節で紹介した宮島（1972）も参考にしつつ考えると、仮に次のような類がとりだせる。ただし検討の余地は大きい。

(7-1) 対象に向かう心理的な態度

心理的な態度を表す動詞は、感情の向けられる対象を表すヲ格の人名詞・物名詞・事名詞と組み合わせる。これらの対象は働きかけの対象とは異なり、変化が生じるということはない。この類の動詞は、命令形や希望形など意志動詞に特有の形をとることがあるが（「反省しろ」「恐れるな」「愛したい」等）、2章でみたように、それがその形の本来の意味で成り立つかどうかははっきりしない。いずれにしろ意志動詞か無意志動詞かの判断の難しい動詞を含んでいる。

・（子供/花を）愛する、（戦争を）憎む、（注射/引越しを）嫌う、（地震を）

恐れる、(合格を) 喜ぶ、(親を) うやまう、(天気を) 心配する、(不勉強を) 反省する、(親を) 尊敬する

(7-2) 消極的な動作

次のような動詞群は、まとめるとすれば消極的な動作を表すものといえるだろうか。【 】内の説明は、宮島 (1972:426) からの引用である。

【本人にとって悪い結果をもたらし、本人が当然さげようとする動作をあらわすもの¹⁵⁾】

- ・(宛名を) 書きそんじる、(用件を) 伝えそこなう、(誤字を) みおとす、(住所を) 聞きそびれる、(好機を) のがす、(約束を) 忘れる、(道を) まちがえる、(財産を) 失う、(目標を) 見失う

【偶然の結果そうなることをあらわすもの】

- ・(太郎を) みかける、(失礼なことを) 口走る、(噂を) つたえきく

【他人の意志によって左右されることをあらわす受け身的な動詞】

- ・(用事を) いいつかる、(影響を) こうむる、(仕事を) ことづかる、(勳章を) さずかる

これら 3 つの類のうち最初の 2 つの類の動詞は、組み合わせるヲ格名詞の表す事物に対して、本来は意志をもって働きかけたり関わったりする動作が想定されるにもかかわらずそれが何らかの要因でうまくなされないことを表している。したがって、「荷物を運ぶ」のような意志動作におけるヲ格名詞を「積極的な動作対象」というならば、これらの動詞と組み合わせるヲ格名詞は「消極的な動作対象」といえる。3 つ目の類も、ある人が他者に「用事をいいつける」ことによってその他者が「用事をいいつかる」のだから、ヲ格名詞(「用事を」)は消極的な動作対象といってよいだろう。

(7-3) 数量の変化

数量の変化を、ある数値からの上下動においてとらえる動詞があり、ヲ格の数量名詞等と組み合わせる。移動動詞の「峠を越える」などと似ており、ヲ格名詞は数量変化の通過値を表すともいえるだろうか。動詞例は多くない。

- ・(上演回数が 1000 回を) こえる、(株価が 1000 円を) 割り込む、(気温が 10 度を) 下回る、(観客数が予想数を) 上回る

(7-4) 事物の間の関係、事物の新しい状態のひきおこし

宮島 (1972:428-429) では、非情物の動きを表す他動詞のうち次の 2 類をそれぞれ、「関係をあらわす動詞」「ある状態をひきおこすことをあらわす動詞」としている。挙例にうかがえるように、これらには、文として用いるときガ格名詞とヲ格名詞が広義の《全体と部分/側面》の関係になるものが少なくない。

- ・(国が統一を) 保つ、(死体が数千を) 算する、(時間を) くら

¹⁵⁾ 後項動詞が次のような複合動詞はいくらか生産的である。「～おとす」(言いおとす、見おとす)、「～あやまる」(読みあやまる)、「～そこなう」(書きそこなう)、「～そこねる」(しそこねる)、「～そびれる」(聞きそびれる)、「～わすれる」(買いわすれる)。

- ・(市場が活況を) 呈する、(発言が物議を) かもす

次のような動詞も、宮島(同)には挙げられていないが、ガ格名詞とヲ格名詞との関係では似た面がある。

- ・(きのこが毒を) 含む、(社会が矛盾を) 包含する
- ・(台風が進路を) かえる、(子供が顔を) 赤らめる、(少女が胸を) ときめかす、(リンゴが赤みを) ます、(空が赤みを) 帯びる¹⁶

これらのうち「含む」の類は、ガ格名詞とヲ格名詞が包摂関係・内在関係をなしている(「きのこが毒を含む」≡「きのこに毒がある」)。また、「かえる」の類は、事物の部分/側面に変化が生じることを表しており、「全体ガ部分ヲ Vt」という他動詞構文で表現できるだけでなく、動詞が有対他動詞である場合や自他両用動詞である場合には、「全体ノ部分ガ Vi」という自動詞構文によってほぼ同じ事態を表現できるものがある(「台風が進路をかえる」≡「台風が進路がかわる」「リンゴが赤みをます」≡「リンゴの赤みがます」)。そして、いずれの類も、ガ格名詞からヲ格名詞への働きかけ性はない。

以上この節では、人の無意志動作(ア-1とア-2)や事物の動き(ア-3とア-4)を表す動詞のうちヲ格名詞を必須とするものをみたが、類も少なく、各類に属する動詞の数も多くない(とくに事物の動きを表す動詞の場合)ことがわかる。

4.2 ヲ格の名詞とは組み合わせさらないが、二格・カラ格・ト格の名詞と組み合わせる動詞

(イ-1) 心理状態の変化や発露

人の心理状態の変化や心情の発露を表す動詞¹⁷は、心理変化や発露をひきおこす誘因¹⁸的な対象を表す二格の事物名詞と組み合わせる。この二格名詞は「感情の誘因」である。二格名詞が人名詞であることもあるが、誘因となるのは人の言動や性質である。

- ・(物音に) 驚く、(練習/おもちゃ-に) 飽きる、(政府の対応/太郎-に) いらだつ、(不正に) いかる、(先輩/留学-に) あこがれる、(相手の反

¹⁶ 事物名詞を主語とする動詞の中には、「武士が刀を身に帯びる」「太郎が口に水を含む」のような人の動きを表す動詞からの多義語化といえるものもある。

¹⁷ 心理状態の変化や発露は基本的には意志でコントロールすることのできないものである。しかし、これらの動詞の中には、演技として意図的にそのような心理のあらわれた様子を表情や動作に表すことのできるものもある(「悲しむふりをする」「驚く表情をする」「泣く演技をする」など)。ただし、それはそのような心理を抱いているかにみえる様子や表情や具体的な動作を意志的に行っている(「驚くかっこうをする」「悲しむふりをする」「泣く表情をする」)のであり、心理変化自体はやはり意志的ではない。

¹⁸ 寺村(1982:139-154)は、感情表現を「能動的な感情の動き」「人を愛する」と「一時的な気の動き」「物音に驚く」に分け、前者のヲ格を「対象(=目当て)」を表すもの、後者の二格を「誘因」を表すものとしている。本稿もそれにならった。

応に) いらつく、(思わぬ出来事に) うろたえる、(敵に) おびえる、(進路に) 悩む、(怪我に) 苦しむ、(人に) 恋する、(人妻に) ほれる // (容体に) 安心する、(熱戦に) 興奮する、(国の対応に) 失望する // (景色に) うっとりする、(上司の態度に) びくびくする、(相手からの申し出に) びっくりする // (生徒の態度に) かつとなる

なお、「酔う」は人の生理変化を表すが、外界からの刺激が誘因になって生じる変化であるのが普通であり、その誘因となるものを二格名詞で表す。他に同様の生理変化動詞はなさそうなので類としてたてずここにまとめておく。

- ・(酒/乗り物-に) 酔う

(イ-2) 事物の存在・出現・位置変化

事物の存在場所や出現場所を表す二格の空間 (/物) 名詞や、移動や出現の前後のありかを表すカラ格・二格の空間 (/物) 名詞と組み合わせる動詞がある。ただし名詞項の必須性には差がある。

- ・(公園に池が) ある、(部屋に物が) ちらかる、(遠くに山が) そびえる
- ・(土手に草が) はえる、(枝に花が) 咲く、(炎が空に) たちのぼる、(煙が部屋に) たちこめる、(道路脇に温泉が) わく
- ・(靴に泥が) つく、(芝生に雑草が) まじる、(教室に消火器が) そなわる
- ・(水が上流から下流に) 流れる、(音が部屋から外に) もれる

(イ-3) 事物の間の比較

2 つ以上の事物を比較して関係を捉えることを表す動詞は、比較する対象を表す二格・ト格の名詞と組み合わせる。

- ・(A が B に) まさる/おとる、(A が B-に/と) 似る/合う (卒業式が祝日に /と) 重なる、(A が B と) 異なる/違う

4.3 主体を表すガ格名詞のみを必須項とする動詞

(ウ-1) 人の内発的な生理変化

人の内発的な生理変化やそれに伴う動きを表す動詞は、主体を表すガ格の人名詞あるいは身体部位名詞のほかには必須項をとらない。

- ・人名詞がガ格になるもの；
めざめる、起きる (“めざめる” の意の場合)、眠る、寝る (“眠りにつく” の意の場合) // 生まれる、死ぬ、老ける、老いる、若返る、疲れる、あおざめる、太る、やせる、衰弱する、眠る、失神する¹⁹
- ・身体部位名詞がガ格になるもの；
(腕が) 腫れる、(おなかが) すく、(指先が) 麻痺する、(頭/傷-が)

¹⁹ これらは基本的には無意志動詞である。それを望んだり避けようとつとめたりすることができるものもあるが(「もっとやせたい」「太りたくない」「眠らないでおこう」)、必ずしもそれがかなうわけではなく、やはり自身の意志でコントロールすることのできない非意志的な変化である。なお、変化が外的にうかがえるものとそうでないものがある。

痛む、(目が) うるむ、(目が) 光る²⁰、(顔が) 輝く、(声が) ひびく、(顔が) こわばる、(息が) はずむ

(ウ-2) 物の状態変化

- ・(皿が) 割れる、(枝が) 折れる、(魚が) こげる、(針金が) 曲がる、(箱が) つぶれる、(セーターが) 縮む、(ゴムが) のびる、(機械が) こわれる、(時計が) とまる、(コーヒーが) さめる、(つぼみが) ひらく、(木が) かれる、(お香が) かおる、(枝が) ゆれる、(沼が) ひあがる
(ろうそくの火が) 消える
- ・(色が) くすむ、(数が) ふえる、(形が) かわる

(ウ-3) 事物の状態変化

- ・(制度が) かわる、(法律が) 改まる、(風習が) ひろまる、(暴動が) しずまる、(規制が) よわまる、(関係が) 深まる、(関係が) こじれる、(町が) 栄える、(産業が) おとろえる、(準備が) 整う

(ウ-4) 事物の出現・持続・消滅

- ・(演奏が) 始まる、(試合が) 続く、(仕事が) 終わる、(国が) 滅びる、(鳥が) 絶滅する、(連絡が) とだえる

(ウ-5) 自然現象

気象や気候を表す次のような動詞も、必須項としては自然現象を表すガ格名詞だけをとる。

- ・(雨が) 降る、(空が) 晴れる、(空が) 晴れわたる、(空が) かすむ、(雪が) 積もる、(日が) 暮れる、(夜が) ふける、(空気が) いてつく、(星が) 輝く、(日が) 照る、(太陽が) 照りつける、(空気が) 冷え込む
多くはないが、時の移ろいを表す動詞もガ格名詞とのみ組み合わせる。

- ・(時間が) たつ、(日が) すぎる、(新年が) 始まる

なお、次のような動詞は、ガ格名詞にあたるものが実際には用いられないことが多い。上にあげた「晴れる、冷え込む」もそうかもしれない。

- ・春めく (「ようやく春めいてきた」)、波立つ

4.4 この章のまとめ

この第4章では、人の無意志動作を表す動詞と事物の動きを表す動詞の構文の特徴をごく簡単にみてきた。暫定的にだが、次のことがいえそうである。

- (1) 人の意志動作を表す動詞と比べて、主体を表すガ格名詞のみを必須項とする動詞も多い。
- (2) フ格・ニ格・カラ格・ト格の名詞と組み合わせる動詞もあるが、フ格名詞も働きかけの積極的な対象ではなく、その他の名詞項も文法的な意味が多様でない。

²⁰下線を付したものは、物の状態変化や自然現象も表す(「ランプが光る」「星が輝く」)。

この章でみとうち (ア-1)、(イ-1)類の動詞は感情の向けられる対象を表すヲ格名詞や感情の誘因となる事物を表すニ格名詞と組み合わせたり、その点で外界との関わりがうかがえるといえるが、これらをのぞくと、無意志動詞の表す動きは意志動詞の表す動きと異なり、主体以外のもの（外界）との積極的な関係を問題としないものが多いといえそうである。ただしさらなる検討が必要である。

5. おわりに

動詞が意志動詞であるか無意志動詞であるかという性質とその動詞の構文的な性質との間にどのような関係があるかについては、従来ほとんど研究がなされていない。本稿は、今後この問題を本格的に研究するための準備として、まず人の意志動作を表す動詞の構文的な性質の解明をめざして考えてみたものである。3.4節でまとめたように、意志動詞には必須項としてガ格名詞とのみ組み合わせるものはごく少なく、ヲ格・ニ格・カラ格・ト格の名詞をかなり必須な項としてとるものが多いこと、そしてその名詞項の文法的な意味が多様であることが確かめられた。そのような構文的な性質は、人の意志動作の特徴（人が外界に対して働きかけたり関わったりすることを表す動作がほとんどであること）を反映するものだと考えた。一方、人の無意志動作や事物の動きを表す動詞の構文的な性質については第4章で大まかな観察をするにとどまったが、ここにも無意志動作や事物の動きの特徴が関わっていそうだとした。動詞の意志/無意志性も動詞の構文的な性質も、ともにその動詞の語彙的な意味の反映だと考えられる。今後は無意志動詞についての考察も進め、動詞の意志性（意味）と構文的な性質（文法）の関係についてあらためて全体を考えてみたい。

参考文献

- 大鹿薫久（1987）「文法概念としての『意志』」『ことばとことのは』4、pp.42-49、大阪：和泉書院。
- 大鹿薫久（2001）「自動と他動、あるいは所動と能動」前田富祺先生退官記念論集刊行会編『前田富祺先生退官記念論集 日本語日本文学の研究』pp.225-238、京都：石田大成社。
- 岡田幸彦（2013）『語の意味と文法形式』東京：笠間書院。
- 加藤重広（2006）「対象格と場所格の連続性—一格助詞試論(2)—」『北海道大学文学研究科紀要』118、pp.135-182。
- 久野暉（1973）『日本文法研究』東京：大修館書店。
- 言語学研究会編（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』東京：むぎ書房。
- 小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹編（1989）『日本語基本動詞用法辞典』東京：大修館書店。
- 高恩淑（2012）「動詞の意志性」を問う—可能形式との関わりを中心に—『日

- 本語文法』12-2、pp.111-127、日本語文法学会。
- 佐伯暁子(2017)「現代語における時間を表すヲ格について」『日本語文法』17-1、pp.54-70、日本語文法学会。
- 杉本和之(1995)「意志動詞と無意志動詞の研究—その 1」『愛媛大学教養部紀要』28-3、pp.47-59。
- 杉本和之(1997)「意志動詞と無意志動詞の研究—その 2」『愛媛大学教育学部紀要 2 人文・社会科学』29-2、pp.33-47。
- 杉本武(1991)「ニ格をとる自動詞」『日本語のヴォイスと他動性—準他動詞と受動詞—』pp.233-250、東京：くろしお出版。
- 高橋太郎(1975)「文中にあらわれる所属関係の種々相」『国語学』103、pp.1-17、国語学会。
- 角田太作(1991)『世界の言語と日本語』(改訂版 2009)、東京：くろしお出版。
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』東京：くろしお出版。
- 成田徹男(1983)「格による動詞分類の試み—自然言語処理用レキシコンのために—」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究—5—計算機用レキシコンのために』pp.160-181、東京：情報処理振興事業協会。
- 仁田義雄(1986)「格体制と動詞のタイプ」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究—7—計算機用レキシコンのために(2)—』pp.103-213、東京：情報処理振興事業協会。
- 仁田義雄(1988)「意志動詞と無意志動詞」『月刊 言語』17-5、pp.34-37、東京：大修館書店。
- 仁田義雄(1991a)『日本語のモダリティと人称』東京：ひつじ書房。
- 仁田義雄(1991b)「ヴォイス的表現と自己制御性」『日本語のヴォイスと他動性』pp.31-57、東京：ひつじ書房。
- 仁田義雄(1991c)「意志の表現と聞き手存在」『国語学』165、pp.120-112、国語学会。
- 長谷川清喜(1969)「使役の助動詞 す・さす〈古典語〉」松村明(編)『古典語現代語助詞助動詞詳説』pp.79-86、東京：学燈社。
- 早津恵美子(2009)「語彙と文法との関わり—カテゴリーカルな意味—」『政大日本研究』6、pp.1-70、台北：国立政治大学日本語文学系。
- 早津恵美子(2010)「連用修飾語の解体—再構築にむけて—」『国文学 解釈と鑑賞』74-7、pp. 60-68、東京：至文堂。
- 早津恵美子(2015、2016)「カテゴリーカルな意味(上)(下)—その性質と語彙指導・文法指導—」『東京外国語大学論集』91、pp.1-33 ; 92、pp.1-20。
- パルデシ、プラシヤント(2007)「他動性」の解剖：「意図性」と「受影性」を超えて」角田三枝、佐々木冠、塩谷亨(編)『他動性の通言語的研究』pp.179-190、東京：くろしお出版。
- パルデシ、プラシヤント他(編)(2015)『有対動詞の通言語的研究』東京：く

ろしお出版.

峰岸真琴 (2007) 「孤立語の他動詞性と随意性」角田三枝、佐々木冠、塩谷亨 (編)

『他動性の通言語的研究』 pp.205-216、東京：くろしお出版.

宮島達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』(国立国語研究所報告 43)、

[主として「第 1 部 意味特徴の記述 3.動作・作用の属性 3.1 動作・作用の属性」 pp.202-229、「同 6.意図」 pp.422-429]、東京：秀英出版.

森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』東京：明治書院.

森山卓郎 (1990) 「意志のモダリティーについて」『阪大日本語研究』2、pp.1-19.

柳田征司 (1994) 「意志動詞の無意志用法 — あわせて使役表現のいわゆる許容・放任・随順用法について — 」佐藤喜代治編「国語研究 5 集 中世語の研究」 pp.327-361、東京：明治書院.

Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson (1980) Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56、pp.251-299.

Volitional and Non-Volitional Verbs in Japanese and their Structural Characteristics
(research note)

Emiko Hayatsu

Keywords: verb, volitionality/non-volitionality, structural characteristics, verb valency

The relationship between the (non-)volitionality of a verb and its structural characteristics (particularly those concerning its valency with nouns) has not attracted much research. In order to conduct comprehensive future research into the issue, this research note mainly considers volitional verbs and examines the case markers of nouns which are obligatory arguments of verb.

The study ascertains the following points: (1) Very few volitional verbs take only the noun marked by the *ga* case as their obligatory argument. Numerous volitional verbs take nouns with *wo*, *ni*, *kara*, or *to* case markers as their obligatory arguments; (2) The grammatical meanings (i.e. semantic roles) of nominal arguments combined with volitional verbs are extremely varied; (3) A basic examination of verbs expressing a person's non-volitional actions and verbs expressing the movement of objects revealed that they possess different structural characteristics from volitional verbs.

The characteristics pointed out in this note, especially for the volitional verbs will suggest that almost all volitional actions by a person involve them actively exerting influence on or being involved with the outside world (viz. things, other people, society, space, or matters). This is reflected by the fact that the various relations with the outside world are expressed using a variety of nominal arguments.